WASON HQ 1104 J74+

May. 1892 no. 316

女學雜誌

第三百十六號
明治二十五年五月七日發兌

ホームと女生（迎春客）

櫻井ちか女史が
女子教育の經歷

ひと村雨（ひさご）

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 316. MAY 7th. 1892.

第三百十六號目次

EDITORIAL:—In Pursuit of Spring.

CHILDREN'S COLUMN:—The Flower of the Family:—(Wakamatsu Shidzu).

MISCELLENEOUS:—The History and the Experience on the Girls Education (Sakurai Chika.)

LITERATURE:—A Verse on Ritaihaku by Ōhoku. (Translation by Jiuhachi koshi.)

SEED THOUGHTS:—The Shower. (Hisago).

CRITICAL NOTES:—On "Abura Jigoku," (No. 2.) (Tōkoku.) The New Published Magazine; (Sangetsushi.)

WEEKLY NEWS.

CONCERNING WOMEN.

THE PRICES OF ARTICLES.

●迎春行

●兒籃 わが宿の花(第三回)若松しづ子

●雜錄 女子敎育に於ける經歷及經驗、第一經歷のあらまし(上)(櫻井ちか子)

●文學 甌北が李太白を評するの一節(無名氏譯)

●小說 黑頭巾(第五回)(十八公子譯)

●隨感 一村雨(ひさご女)

●批評 油地獄を讀む(二)(透谷)○新刊雜誌(山月子)

●女報

●物價

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と／＼少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ／＼年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學することも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、衞生、育兒、看病と合す）裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百十六號 明治二十五年五月七日發兌

迎春行

（四十七）山口空洞

少からぬ期望を懸けて山口に入り、心細く失望して馬關に走る。英佛の軍艦を撃ち却ぞけ、幕府の長軍を防禦したる英氣今ま何處にありや。松下塾の慷慨家遠く失せて、松風の音ひとり歔欷す。當年の俊才台閣にあり、今時の年少徒らに仕官を懇望す。其學事は意外に進歩せず、其富は意外に少なく、而も、人民勤勉の風に乏し。撰擧する所ろの議員大率ね吏黨にして、縣下に民黨なく、有志家と稱ふべきもの亦少れなり。山口の人にして深く長州を知り、且つ切りに其國事に痛心せる某に問ふ、今の長人は何如ん、某、答ふらく、愚圖なりと。師範學校長は云ふ、其女子部の卒業生は過半不評判なり、其幾分は實際不品行なりと。人心を激揚し、後生を奬進するの道善ならず、而して方今の形勢如此しとせば、長州の前途實に歎くべき也。凡そ英才悉とく都門に出で、郷關に育英の道を備へざる時は、何の地と雖ども末路到底此の如くならざる可らず。而してたま〳〵在る所ろの育英所も、亦た只だ當路台閣の鼻息を窺つて風針と爲すが如きに於ては、未だ決して英物を出すと能はざる也。薩州元來團結に固しと稱す、然れども、南州と甲東と先づ相分れてより、百二都城の隼人必らずしも悉とく官員を榮えとせず鹿兒島城外、現に黨を分ち、薩陽に尙ほ民黨ある也。思ふに、彼の地は人才激揚の方を絶するとなからん歟。長州の貴顯都に一和する所以のものは、則はち郷に俊傑に出さゝるの理なり。よりて一策を献ず、公等が郷關をして若し長久に眞英傑を出さしめんとならば、先づ公等に泥和せざる志士をして小こしく長門の内に疾呼するの餘地を得せしめよ。其知事をして公等がお留守居たらしむる勿れ。其校長をして公等が代言人たらしむる勿れ。更に好きは、玆に一民黨を結成するにあり、民黨起らずんば、長門の內、とこしえに昏睡熟眠せん。

（四十八）

長府は當に將來に於ける中國及び九州を連結する學校の大府となるべし。目下、長崎に四五の高等學校ありと云へど、長

崎は最早九州の要地にはあらず。熊本は蓋し九州の腹心たり、福岡は蓋し其胸たり、各箇もとより高等學校なかる可らずと雖ども、能く、中國と九州と、尙且つ四國の或部分とに連應する學校の地は、必らずや長府ならん。古への國府は今后の校府たらん、仲哀帝の穴門は、明治年代西方學士の淵藪たるべし。

(四十九) 壇浦宮の落花

壇浦町赤間宮に安德帝を祀る、石碑あり、建久年中に創建すと云ふ。老樹鬱蒼の下、墓石累々、幽かに顔して、兼平之墓、敎經之墓等、凡そ十數あるを示す。余は、安德帝の万歲を餘處に過ぐし玉ひしとを信ぜんと欲す。然れども、壇浦は到底幾多恨死の魂を埋め、千歲の怨みを平家の蟹に遺せしや必せり。余れ此の宮に詣でゝ感慨深し。時に櫻花は、色めき、二片三片早や散りかゝりて見ゆ。京を出る時、余、書生が贐にせし傘を受くるの辭に、願はくは歸途一日の閑を得て芳野の櫻を賞めん、其時ことさら此傘を挿し、落花紛々たる下に立つて諸君と共に春の日の雪見せんと云ひぬ。されど、旅行意外に延びたれば、歸途に芳野の花に出で合はんやうあらずとて、此時則はち傘を開く。壇浦口頭の風さと吹き拂ひ、花片々落つ。奇しみて余を見るもの安くんぞ情を知らん。心なげに笑ふ人、余が心を知らず。

(五十) 平家の官女

四月年々祭あり、稻荷町の娼妓官女の樣して行く。後へは、神官馬に乘りて隨身し、人々白衣を着けて扈從す、宮に至れば、娼妓の官女、神酒を戴だき、菊花の形ちしたる菓子を受く。之を馬關に於ける大祭となす。傳に云く。むかし平家の官女落魄して此のあたりにさすらひ、憫れむべし節を賣りて辛くも口に糊す。朝たに平氏を迎へて夕べに源家に接はる。金帳の幕破れて、屛風身を擒にし、蘭麝の香ほそ〴〵として同胞の死骨を消す。惡むべし、常磐の屈に倣ふと雖ど、家嗣を繼ぐの義を行ふ能はず、徒らに死を惜みて飯の爲めに全心を殺す。遺風今に及びて、馬關に一種奇怪の女あり、日暮るる比ほひ、百餘の小舟東西にこぎまはりて、連りに客を求む、或は屋根舟の上に突立ち、輕衣を風に吹かせ、恬然として白首を四方に曝らすものあり、官、許して之を海娼と云ふ。長府女學校の敎師某、之が爲めに賣られたる少女二人を救ひ、現に之

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を致養す。其言ふ所ろを聞けば、飯を與へられず、縄にて弔られ、棒にて連打されたる數ば之れありとぞ。極慘極醜の事なり。

以上は前號の「鹿島鎔造館」の前に出すべきの處、原稿延着して、本號に掲ぐることなりぬ、隨て以下の番號前號より次第に繰り越し來る、讀者請ふ諒焉。

(六十) 扇島の今昔

長崎に於ける余が宿は江戸町にあり。彼の蘭人の居留地たり、日東開化の搖籃たりし出島に隣る。反譯の破天荒、蘭化先生前野良澤、蘭醫の大成桂川甫周、砲術の率先者高島四郎太夫、博物學の先登者伊藤錦窠先生は言ふに及ばず、大隈、井上、伊藤の諸公皆この地の卵なり。化して大鵬となり、青空に飛揚すと雖ども、皆これ當年の青書生なりき。而して、日本に開化を誘引したる長崎は、今や他の四港の后にあり、其文明凡そ十數年の後れを爲す。人民懶漫にして遊藝末技に耽り、狡猾の細利に長じて、斷て勤勉なる大利益を握らんとせず。港權日々に他に移るを知らずして、百年の長眠を貪ぼる。憫れむべき哉。

(六十一) 聖壽山崇福寺

友に誘はれて、聖壽山崇福寺に遊ぶ。支那人の爲に設けたる寺院にして、開祖即非は唐人なり。堂宇伽藍の結構想じて唐めき、山門の景色日東に無き所ろなり。友は言ふ、此院内の文字清秀、恐らくは日本第一ならんと。余は之が爲に動かされて遊覽したる也。門を入る時、頭を擧げて見れば、即非が筆にて、「第一峰」と顔したる額あり。筆力雄健、風趣清高、たとへば鶴の九天を飛び、大魚の深淵に泳ぐが如し。門を入りて、數多ある長幅、方額を一々熟視すれば、或は虎の嘯ぶくが如きものあり、或は龍の舞ふが如きものあり、或は古聖の彷彿として臨み來るが如き、或は美人の窈窕として輕袖を飜がへすが如き、長江の遺決するが如き、大山の蟠まるが如き、肉肥え氣滿ちて勇士の力を角するが如き、昂々乎として瘦仙の輕ろく歩むが如き、神韻渺邈として悉な捕捉すべきにあらず。余恍惚として佇立し、久しうして友に謂へらく、余は請ふ之より字を習はんと。

(六十二) 書道

古賢、六藝を以て人を教ゆ。中に書あり、書は必らずしも藝のみにはあらず。六藝の教旨皆な末技たらんが爲にはあらざる也。書を學ぶものは、其道を悟るを要す、所云る書道これ

也。純白の紙に對して、黑墨を引く、衷心の相を寫すと之よりも明らかなるはなし。心正しければ、字正しく、心曲れば、字又た直からず、文字の躰は即はち心緒の形なり。此故に、禪道の人は大率ね書を用ひて其心を正うす、禪僧に能筆の人多きは之が爲め歟。西鄉南洲平常字を作りて膽を練る、奔馬を一指に繫ぎ、慷慨を腕臂に集め、下筆淋漓、万斛の思ひを點漏す、豪傑の書に於ける亦た一快事にあらずや。此の故に、書を見て人を知ることを得べし。一文字を相し、其始、中、終の氣力何如んを察して、人の氣質を評するは難きにあらず。佐久間象山が、手書によりて人物を鑑識したるは亦此の故なり。

（六十三）長崎人の誇

長崎の人何ものをか誇る。云はく丸山の遊廓に、玄宗皇帝が鶴の枕あり、揚貴妃と共に用ひたるものにて、珍らしくも此地に舶來せりと。あゝ是れ長崎人の名譽とする所ろ也。長崎人、其娘を外人に賣り、月給を算へて銀何枚と云ふ。而して枚數の多きは其光榮なり、隣人互ひに何枚と稱して其娘の出世を誇る。嘗て博士イービ氏の演說を聞くに、英米年少の商人はる〱日本に來るは、啻に金銀を利せんと欲するのみにはあらず、此國風儀上の取締り放埒にして年少者が勝手氣儘の行を爲すと。自由なるに因る、彼等は情火を燃して來り、遠慮なく會釋なく此國の姉妹を汚すと云へり。其言少しく酷なりと思ひつれど、余は長崎に來りて、寧しろ此言の足らざるものあるを覺りぬ。又嘗て、サムエル、ムッチモア氏の"Moghul, Mongol, Mikado and Missionary"を讀むに、云く、日本の婦人は、人の妻となるに先一と度び娼妓とならざる可らず、是れ日本の賢妻となるに要する一資格なりと。余輩が同胞にして此文を讀むものは、何人か奮怒し、其妄言に憤ぼふらざらんや。然れども、長崎に近きほとり、往々此の怪事なきにしもあらず。福田に於ては、己が愛娘をして、自宅に於て密賣せしむるものあり。天草島に於ては、一と度び娼とならざるものを「未だ勤めせず」と稱し、之を娶るに躊躇するもの多し。嗚呼日東の同胞よ、聞け、大日本は實に姦淫公許の國なり。諸君のうち、娼妓を母とするものあり。諸君のうち娼妓を娘とするものあり。而して、諸君のうち娼妓を友とせざるもの果して幾人ぞ。嗚呼、天に聞け、嗚呼、地に聞け、我が愛す

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

べき日東の神洲は、姦淫國なる乎。姦淫國は、食言の郷なり、懶怠の郷なり、節義なき國なり、氣骨なき土地なり。如此き國の民は、美術を知るとなし、教育を重んずるとなし、室家を愛するとなし。輕軟浮薄にして、絶へて重厚、謹嚴、高潔の剛德あることなし。あゝ、悲しひ哉、何如にしてか、此の姦淫國を一掃すべき。他なし、先づ公娼を全廢するにあるのみ。

（六十四）風景と詩人

花を眺めて歎じ、月を觀てかこち顔なるは何故ぞ。「櫻花爛熳」と題せる去る年の余が論文にて解すらく、此は是れ人の情其の本色に反り、雜染を洗つて實相を觀じ、世のはかなき事に思ひつきて、人の運命に悟り到るがゆえなりと。此回の旅、外景に感じて心動き、振つて添附せる雜情を拂ひ棄てたる折々は、たとひ必らずしも昔日の歎きを再たびせずとも、常に眞心に反りて彼の妙理の則を證せずと云ふとあし。然るに、京より送り越せし女學雜誌を展けば、透谷君が、松島に芭蕉翁を讀むの一文あり、例の緻密精細なる批評眼もて、好風景に於ける詩人の感情を照し、一々其心理を解剖せり。所云る渾然たる同化を生ず彼の一なるものが、詩人と好風景とを打つて庬々たる空想無念の一となすと論つろふに至りては、頗ぶるコンコルドの學風に似たり。古人某の詩話に、風景奇絶なれば騷人眩惑し詩情澁縮すると古今皆悉とく然り、余は平日此の窠窟を脱せんこと、絶勝に遇ふ毎に必らず心思刻苦し、好詩佳句を得ざれば措かず、凡そ詩を賦する者は、心を一層の上に置き景色に拘繫せられざれば可なり、景色に緊縛せらるれば不可なり、古人泰山に上りて天下を小とすと云ふ、其義存する所に兩端ありと雖ども、詩魂の遊ぶ所ろ此の如くあらずんば則はち詩人と爲すに足らずとあり。されど、此は作詩人の論にして、眞詩人の情にあらず。迎春行の一旅客は、不幸、某詩仙の言に服する能はずして、寧ろ友人、透谷君が假説に同ぜんと欲す。

（六十五）ホーム及女性

廿三日朝、熊本英學校學生の爲めに、雜感を演ぶ。其夕べ、久留米に行んとて、停車塲に到り、少暫、待ち合はす間に、室内に備置れたる國民新聞を讀むに、十七日の紙上、女學子のホームとか題したる論文ありき。率々として讀過るに、又

た例の筆法にて、英雄めきたる文字多し、今時の慷慨書生に好かれん爲めかと、一笑に附しつゝも、全躰の措辭たゞものの力にあらず、蓋し自から其室家に激する所ろのものありて成れるなるべし、幾分の血性文字、多少讀者を誤まらすとなからずやと案じて、此に此朝た、英學校にて演述したるものの一節を記し置くの必要を感ず。

校員某問ふて曰く、今時文章を作るに尤とも大切なる心得は何なりや。余、答へて曰く、虚言を言はざることを第一とす、今の文章は過半虚言を記す、實際を記すものも之を大業に書く、要するに皆な不眞實なり、自己激する所なくして人を激せしめんとし、自己泣く所ろなくして人を泣かしめんとす、故に其文學窮屈にして伸びず、大音にして正實なし、連りに、活の字、大の字、然の字、を用ふれども、鐃の響く音よりも力弱はし。余思ふに、方今作文の第一要訣は、眞實の事を、眞實に記すにありと。

余、亦た、九州男兒の爲に、一言を寄せて云く、九州男兒の豪骨は既に名あり、余は其の軟化せざらんことを熱望す。然れども、諸君は、人物と云ふものゝ理想に付き、一事を辨知せずんばある可らず。即はち東洋風の野蠻的理想より、一段開化せずんばある可らず。夫れ、武力を以て人を服するは、情を以て人を服するに若かず、然れども、到底人を服せんとするは尙ほ不可なり。これ尙ほ人は拮抗するの獸性を存す。寧ろ人を憫れみ、人を重んじ、人を愛して、之が爲めに身を献ずるに若かず。世上、もし、地あるのみにして、人の此の上に立つ外、わが念ひに映ずるものあらずば止むことを得じ。左れど、吾等が頭上には、崇高なる天あり、吾等が良心には、人に敵することの極めて小さきことを感ず。諸君、人に敵するの英雄は小英雄なり、人を服せしめて驕然たる人物は小人物なり。余輩更に一層の上より觀じ來らば、他の靴を握るも苦しからず、他の足を洗ふも恥かしからず。赤子をもてなすは樂しからずや。婦人を助くるは勇ましからずや。余輩、他人の爲に使はるゝは最上の幸福にはあらずや。故に、九州男兒は、其猛烈なる獅の力のみを勇なりとせず、更に温柔なる羊の優しきを以て力なりとせよ。むかし、基督、容易く自から許さず、甞て其自己を許したること稀なり。たま〳〵一度び其の許す所ろを聞け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ば云く、吾は柔和にして謙だるもの也。と柔和と謙遜とはこれ人の徳の最上なるものあり、あらゆるもの之に接すれば屈す。人此に達して初めて聖となるなり。基督世に光りて、初めて此の徳を大ひに發揮す。爾來、人物の理想を一變し、所云る男性の徳に女性の徳を配し、文を、武に合し、天使を肉の人に接へたり。諸君、史記、戰國策の英雄たらんヿを欲せず、聖經の人物たらんヿを勉めよ。古來經驗ある人は、往々此大道を悟り、其一部分の眞理を世に發露したり。則はち、孔子は謙を以て益を受くとし、武人は、柔よく剛を制すと云ひ、世人は、諺に負けて、勝つと云へり。ともに、大道一部を悟覺したるもの也。彼の眞勇なきものは、口に人情を談ずるヿを恥づ、何んとなれば、如此くば、人の見て吾を怯なりとせんヿを恐るゝなり。恐るゝの念既に大怯なり。吾は人なり、故に情あり、情あり、故に涙あり。悲しくして泣き、泣きて涙を落さんに、何の爲めに之を隱さん。情ありて、之を露さんに、何人に之を秘めん。情と涙とを示すをもて弱はしと云ふは、實は弱意虚飾の人なり。諸君、或る意味に於ては、女々しかるべし、女々しきは即はち雄々しきなり。九州男兒は、優しきヿ、涙あるヿ、弱々しきヿ、負けるヿ、使はるゝヿの人徳を、一層味はひ知らずんばある可らずと。

此の理、うつして、彼のホームを馭する人の參考に供するヿを得ん。余は、彼の論文の起草者が、くれ〴〵もホームの德を味ひ知り、野蠻風、東洋風、の豪傑を以て自任せざらんヿを祈るもの也。

○○○（六十六）觀察

智力の自修鍛練に於ては、判斷、及び觀察を明らかにせよと云ヿ、是れ余が所々に於て演述したる所の一節なり。而して今や、余が迎春行の觀察何如にも淡薄無味なりとて叱責せらるゝに合ふ、慚愧顏に汗す。但だ余は知人に對し一言陳じ置かざるを得ず。余や不才を以て甚たく觀察に耽り、みち〳〵の經行、さま〴〵の假說をつくる、私しに記して堆を爲すものなきにあらず。然れども、彼の飛脚の如く走り行く旅人が數日の觀察をもて大業の事を記すは、何如にも片腹いたきヿにて、從來内外の紀行者の文に此痛弊を見、自から戒しむる所ろあり。故に、明白の事實にして、堅確の信あるもの丶外

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、記して公に示すことなし。隨ひて、記事自から奇ならず、百篇悉な一律の歎あらんは必せり。謹しみて之を知人に謝すと云ふ。

(六十七) 井上、稻垣二氏

余が行くみち〳〵に、二人の先行者あり。不思議にも、余は其あとを行けり。一は井上圓了氏にして、他は稻垣滿二郎氏なり。井上氏は、何如ほど迄で、基督教界の事實を知り玉ふやらん、たゞ其語り玉へることを傳ふる事の多く愚見と違ふもののあるを歎ず。稻垣氏は、一ヶ所に數日間滯留して、其港灣に關する百年の大計を觀察陳辨せらる。而して、哲學的思想と、對外的思想との、偏僻地方に擴まりゆける跡を踏み見て、心快然の感なきにあらず。

(六十八) 加藤清正

加藤清正は、ひとり野戰攻伐の英雄たるのみにはあらず、居常論語を愛讀し、深く修身治政の道に思を潛む。終生の品德は敬の一字にあり、全躰の人物は純平たる武士なり。其の三成、行長を惡むは、宗教的の日本思想なり。蓋し今の保守黨が基督教を嫌ふが如きか。則はち、其旗に標して、南無妙法蓮華經の七字を書し、外敎に對する國教の氣節を發表す。其肥后を治むるや、深く外敎の防禦に注意し、國民に敬神の念を篤からしめんとなしき。而して、其の堤坊を築き、水利を修むるに當ても、亦た此を利用し、大ひに用ゆべき巨木には七五三繩を張り、要處の水路には賢木を植え、以て人をして暴りに手足を入れしめず。熊本城の西北に廟あり、淸正を祭り且其書を掲ぐ。額面に敬の一字を大書し、傍らに、主一無適の四字を註す。其の國民に敎ゆる所ろ知るべき也。爾來二百八十年、遺風團結し、敬神の習慣、熊本人の骨髓に徹す。然れども、眞神を敬せざるの敬意は、人心を陋固偏小にして、之を活達流快ならしむることなし。熊本人の小黨分立する、又は、大義名分の議論に忙はしくして、而も實行に敏ならざる、或は此遺傳の氣質に根せずや何如ん。之を聞く、熊本縣下に大盜巨罪なし、十年間に千圓を盜みたるもの只一人、其他は、細々たる竊盜のみ。而して、牢獄は極めて粗なるに、脫逃するもの少なく、人に敵することを多けれども、面前白刃を拔て切るものはあらず、大率ね、暗擊に長ずと。彼の敬神黨、近ごろ迄で、髮を結び、電信柱の下を通行せざりしが、近日、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

黨勢一變し、之を解散するの議論隆んなるに至りぬ。思ふに、大勢は浸々として遠からず此の保守固結の籠城を破開するに至らん歟。

寂々たる夜半

暗光

知らざりし前こそ心も強くありけれ、なまじ心の友といふもの人間の世界にありけりと、心のまなこにうつりそめしより、とかくに人の上に涙の水かさ増しもてゆき、かの兼好が

山里はとはれぬよりもとふ人の
かへりてのちぞ淋しかりける

と詠じたりける思ひに同情の感あさからず、ある一夜、田舎の宿にたゞ獨りそぼふる春雨の聲打ちきゝては、そゞろに意中の友びと、旅の友、愛する妹等、家の人々のとなど、淋しくも思ひ續けてたえやらぬに、思ひ寐の夢はあやなく涙に愕ろかされて破られつ、枕をあぐれば四隣寂々として人影もなし、たゞしづかに聽ゆるは松風か蛙の聲か、ともしびは冷やかに細きかげを長くひけり、思はずも

悲夢さめて人なき夜半に遠蛙

しばらくする程に風強く吹きあれて花ちらす音騷がしけるに、吾が想いよ〳〵閑寂境に坐禪するが如し。

花あらし騷ぐほどなほ大閑地

兒籃

吾宿の花

第三回

若松しづ子

母はルーセの幼ない時分に、此兒は秀逸者に違いない、たゞ善に向くか惡に向くか、それは分らないと、度々申升た。なぜといふに、幼少の時分から、きかぬ氣で、神經質で、氣六ケ敷所が有て、機嫌もとり惡く、又躾のしやうも困難でした。氣儘な質の兒故、根と枝斗りで、一向花の氣がなからうといふのを、極く堅固した所と情の厚く優敷所が有る斗りで、見直しが出來るのでした。此兒は靜かな處に獨り逍遙するが好で、他の子供が遊戯する時間に、自分はチット坐て想像界に思を走らせ。又好んで、秘密を探つたり、強いて危險を侵したりし升た。此兒が野外に逍遙する處を見たもの、爐邊に沈默で考へて居る處を見たもの、又日曜に禮拜堂に參會した時分の嚴肅な容貌を見たものは、必ず振向いて、見直さぬと云ふとはなく、其上容易に忘れることが出來ませんかつた。時として母は嚴格なその顏を眺るにつけ、深く又烈敷性質のあるのを認めて、我兒の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

將來を量り兼ね、戰栗するとが有り升た。始めには、此兒は善良な質かと氣遣ひ升たが、後に至つては、其心配は消え去せて、鬱憂な氣立では無いかと心配する樣になり升た。沈鬱なまゝで生長して、怜悧ある其心が他に敬服する處が有ませんでしたら油々敷結果に成なかつたとも申されません。然るに、年を經るに從つて、他の子供が家族に加はり升て、其間に氣の強い爲に、殊の外心を痛められる時もあり、無理ならぬ其嗜好の傷けられたるとも屢でした。母は始と變て躾方にさへ注意するとが出來ず成升た。家族の雜用は此小女を引廻し骨の折れる俗務は四方より迫り、強ひて理想世界より引離し、現在世界に呼出し升た。それ故、妄想も、詩歌的の考へも、爲に沮まれて、熟達する機會がありませんかつた。數年の間、ルーセは此通の身の上を頻りに殘念がり、唧言が間敷とを申すもさへ屢で、己が週圍に迫つた俗務より如何にして免かれやうと工風を凝し升た。然るに時を經るに隨つて、困難なる事情は却て此小女を發達させる機會になり升て、考へ深い性質を根本にして、餘裕も有あれば、自由も利くといふ塲合には容易に結ばぬ程な立派な果を結ばせ升た。日光は終日山の頂に光輝き、そして、夕暮にも暫らく山の端に名殘を惜んでは居り升が、青緑なる處、富饒なる處は、反つて下の谷合で、山嶺は荒蕪で、實收が薄うござい升。

父と物語した翌朝、ルーセは早く起き、窓を開いて暫らくの間は新鮮なる空氣を味はい升た。嬉げしに囀づる小鳥の聲の外に音もない東天の靜肅は、少女の心に染み渡つて、非常な爽快を感しめ升たから、眼の前の景色を眺めつゝ、いつまでも思想を練つて居たかつたのでしたが、俗事は又も少女を想像界から呼戻し升た。癇走つた男兒の聲で、

ルーセさん、ルーセ姉さんてば、あのおつかさんがネ、下へ降りて來て、僕の顔だの、トムの顔だの、みんなあの顔を洗つて下さいと。

ルーセは驅け下りて、いつもより尙優しく、丁寧に子供の顔洗の世話をし升たので、子供たちも案外に柔順でした。

ルーセ姉さんが、いつでも顔を洗つて與るんだと好イ。大姉さんは鈍くつて〳〵、そして、ひどく磨るんだもの。ハナさんはハテさんで、いつでも、せつかち斗りして居て、ろくに洗つて與れやしないわ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

といったのは、弟のトムでした。ルーセは機嫌よく、

おつかさん、赤ん坊を抱きませうか？、

今も少したから抱いてお呉れよ。わたしは御飯の事を一寸見て來るから、此兒はまた齒が生へるさうで、夕部は何だか落々しなかつたよ。

それじやわたしが今夜抱いて寐て見ませうか？、

どうして、おまへ、夜まで寐かさないじや大變だよ。

ルーセは、赤ん坊をとつて、寐衣の皺を伸し、上り口へ行つて、急はしくかくしから取出した書物を讀み始やうといたしました。赤兒は書物を見て嬉しげな聲をたて丶、俄かにそれを引抓ふとした威勢が餘りおそろしいので、ルーセは既でのとに、子供を下へ投げ出さうとしました。

そこで手を一杯に向ふへ伸して、書物を持ち、まだ讀まふと試みて居り升た處が、赤子は之を取らふとする手を伸すに懶んで、泣き始め升た。この時、ルーセは始めていら／＼し升た。據なく書物をかくしに藏め、子供を抱いてあちこち歩るき始め升て。

おまへは、なぜわたしに少し樂をさせて呉れないの？、

温い濕り氣の多い朝でしたが、大きな重い赤子は、幼ない子の慣とて頻りに身を働かせて居りました、自分の身躰をこちらかと思へばあちらへひねり、大急に足をつかまへて反りかへる處を落さない樣にすれば、其次にはルーセの肩へ伸し掛つて、我物顔にルーセの眼鼻を玩弄び升た。ルーセは疲勞を感じ始め升た。奥に入つた子供と同感にはなれず、かつは書物に付て、怒るまでの事はなくとも愁たとなど思ふて、

我神よ、願はくは自身に忍耐の德を修め遂げさせ玉へ。

と口の中に祈念し、漸く不平の念が靜まつて忍ぶものも來る樣になり升た時分に、リベカが二人を尋ねに出て來升た。

さあ、其兒をこつちへおよこしなさいよ。肱がいたくなつたでせう。それにおつかさんが御用ですと。

ルーセが家へ這入つた時は、モウ朝飯の用意が出來て居升た。母は、

ハテを二度も呼んだが、まだ下へ來ないよ。おまへ一寸と二階へ上つて、直ぐお下といつておくれでないか？、

ルーセが行つて見升と、ハテは寢衣のまゝで、鏡の前に髮を結つて居升た。

一一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ハナさん、おつかさんが、二度もお呼なすつたさうじや有ませんか。

だつて、しやうがないは。大急ぎでして居るんだもの、何の用だつて？姉さん知つて入らつしやるの？。

御膳が直き出來ると云のに、お膳立がしてないんですよ。

オヤ、それッ切りのよ？、そんなら、今度丈ルーセさんして置いて頂戴な。いつかあなたの番の時塡合せするから。

といひながらゆる／＼髪を捲たり又解たりして、ちゞらして居り升たが、其中に母の聲に驚ろかされ升た。

ハナや、おまへ、姉さんがお膳立してるの知つて升か？。

エー、一度ッ切りして遣るつて仰やるんですよ。お膳立なんかそんなに大變な骨折でもないでせう。

と、母の不機嫌な顔付を想像して態と問ひかけ升た。

それは大層お骨折といふではないが、チヤンとした諦りを守つてこそ家族の幸福も有るのだから、おまへは矢つ張り、おまへの分と諦つた仕事をしなければならないよ。ルーセにさう／＼幾度か推つけないで。

おつかさん、今度つからし升よ。そして今モウ直つき下へ下り升よ。

然るにお膳立も悉皆出來てしまふまでは逐々出て來ず、出て來た處を見れば、餘りさゑ／＼として、ニコやかで、美敷ので、家族のものが一人も睨まへる心地がしませんかつた。母さへ心の中に、同じ娘でもさま／＼だから、思ふ樣に變へる譯にはいかないと思ひ、矢張り其美敷のと、面白味のあるのに心を奪はれて居り升た。

此日は殊に土曜日で、平常より尙一際雜事が繁多でした。赤子は兎に角一人丈は持切りにして居り升て、よし家族中かゝかり切つて、御機嫌を取ても、一向過分とは思ぬ調子でした。子供たちは半日休業で、家の週圍を非常に賑はせ升た。日曜着の着物は揃へねばならず、土曜日に諦めてあるパン燒もせねばならず、ルーセは一寸の暇も有ませんかつた。それに今日ほど靜かに考へる暇を熱望したとは有ませんかつた。其日の中に一度か二度も父が深切な氣の毒さうお眼つきで自分を見て呉れたに氣が付き、又母は一二度心の温かさを籠た優しい言の葉をかけて其心を勵まし升た。この通りにして、此一日も刻々消え失せ、夕暮れまでになり、それと共に一日の苦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

難も消へてなくなり升た。父は開いた戸口に佇んで居り升たから、ルーセは側近く行升た。父は、

けふは、忙敷日で有つたのう。

大層忙がしう御坐い升た、アノおとう樣……

何だ？

この通り事多の中にどふして、信徒たるに叶ふものにおれませう？

父は直ぐは答へず、前なる小庭に何か眼をつけるものがある樣でした。間もなく、

おまへあの石塀に纒ひ着てる蔦を御覽、石や棒につかまつて、それを支へに、上へ上へと登つて行くじやないか、おまへも其通りに日々の雜務を利用して行ねばならんよ。雜用に妨げられるではなく、それを扶助に上達するが眞理であらうよ。

それはまた困難なはなしですよ。

承知して居るが、それより外に仕方がないのだよ。神樣の御祐助も有からな。

今日は扶助ではなく、却つて妨害になり升た。

それはおまへの觀念の眼が違ふからだよ。兎に角、一ツのことは確然だよ。夫は、現在の有樣の中に置き玉ふのは神の思召で、日々の雜務を指揮なさるも矢張神樣です。既にさう有つて見れば、智慧も慈愛も限りない御神が、おまへを御自分に近く引寄せはせず、却つて遠ざける方向に導く樣な義務をお授けなさると思はれるか？

ルーセは嘆息し升た。心の中に一方ならず惑ふて居つて、父のいふ事を判然と會得がまだ出來ませんかつた。

おまへ暇々に篤と考へて御覽、そして祈念を凝らして居る中に此眞理が、分るであらうよ。

父は眠に着く挨拶をし升て、ルーセは直ぐ二階の小さな部屋へ行升た。實に小さな部屋で、小道具も安ぽい物計りでした併し其懇なる穩靜を賴みに、神を尋ねて得升たのでしたから。今も跪づいて、神靈と交親した、至聖なる其場處の天井が低く週圍が粗造な白壁で有つたとて、立派に高く、錦を飾つて有つたとて何の違が有りませうか。

雜録

女子教育に於ける經歷及經驗

第一　經歷のあらまし（上）

櫻井ちか子

明治初年に於ける女學の風、

維新以後に於ける我邦女子の修學は英語を以て其はしを開きしか如し、明治五六年の頃に至て其風益々盛にして、當時唯一の私立女學校なりし齋藤つね子の芳英社は英語を專門として教授し而して百餘名の生徒は此處に業を修めたるを以ても其有樣を推知し得らるべし、

其後明治九年に至り皇后陛下の特旨によりて女子師範學校の設立せられたることは、女子の勉學に非常なる奬勵をあたへ其勢なか〳〵盛にして、たゞに年少の女子のみならず已婚の婦人而かも年すゝみたる人までも學事に志すもの多く、或人は學校に通學し、或人は教師を聘用するなど家々の學窓の下外史を講ぜざるものなしといふべき有樣なりき、因に曰く、外史を講ずるといふは、此時女子師範學校の科目に外史文章軌範の如き漢文もの用ひられしにより、以前の英語修學少しくすたれて、漢文もの大に流行せしなり、

櫻井女學校

我の女子教育にたづさわるはまことに偶然なることより起りぬ、そは明治九年の頃より僅かなる幼年子女を集めて教へおりしが夫の十八年に西南の亂起るや、我良人は海軍に奉職せし身なるにより、命を蒙りて、戰地に赴くことゝなり、我はたゞ留守宅をまもる閑散なる身となりたり、此時我良人の同僚の妻君達のうちに學事に志す人ありしが、其各自の良人連が戰地に服務中は我と同じく留守宅をまもる閑散なる身なるにより、此閑暇を以て勉學の時に當てんと欲し、我許に來りて教授を請はれけるが、我固より淺學、人に教授するなんどの任に耐ゆるものにあらざれど「教ゆるは學ぶのなかば」此の諺もあればとて其身の閑散あるまゝ、此依賴に應ぜしかば、同居するものもあり通學し來るものもありて、こゝに始めて數人を教授することゝなりぬ。是に於て即ち地を番町に相して生徒を寄宿せしむるに便利なる家屋を借り受け一小女學校を設置なることゝなしたり、是れ我れの女子教育てふも

のに身を委ねたる始にて櫻井女學校の基礎を置きたるときなりき。

我の此事は計畫する前、之を我眞人の友なる某氏に相談したりしが、某氏は學校事業の至難なるわざにして微少なる力と僅々なる資本とを以ては着手すべきものにあらざれば寧しろ閑居して自己の修學を勉むに如かずとて、いたく之をとゞめられしが、我は未だ此事業の經驗を有せざれば從て其困難をなめざるになり、且は思ひたつ折柄とて、例の精神一到何事不成の句を口にし漫然此事業に着手したり、然るに着手してのち身自ら事の實際に當るや、此處に始めて某氏の言に思ひ當りたり、即ち種々なる困難、辛苦、心勞一時に我前に横はり來り、微弱なる力如何にして之れが排除に當らんかと一時は當惑にくれて其着手の輕忽なりしを悔ひたりき、さりとて此塲合となりて勢廢校することもならず、又我心にもいたく之を欲せざりしかば、或時は寢ず、或時は食はずして思案をいろ〳〵めぐらしたりき、困難の第一は學校の經濟にして甚しく我を苦慮せしめたり、學校の收支は固より相つぐのはざるにより、我の有する資産を悉く投ぜしかども足らざりしが故に眞人に請ひてうけ得べきだけの助力をうけたりしが、尙足らざりしかば此に於て詮方盡き、生徒の望をつなぎ多くの人を集めんには眞敎師を聘用するの必要なることを悟れども、其高給なるを以て之をさけ、出來得べきかぎり、身を以て之れに當りたり、かてゝ加へて此難時に當て始めに助力をなしたる人すらも其手をひき、たゞ眞人の補助と眞人の友人手塚氏の助力とを得て、萬事皆我手に引うけたり、此に我は心を決して謂へらく「自己の事は自己にてなすべし」と即ち每朝六時より始めて午後五時にいたるまで授業を爲し、終りて後は寄宿生の監督及諸の校務を濟し、而して尙餘暇あるときは未だ學ばざりし學科を身自ら修行したり、此くして諸事身一つを以て當てたりしかば、我の補助者としては僅少の報酬を以て聘用せし近隣の漢學先生のみなりき、今日にして當時を回想せば時節も時節なれど諸べて足ず勝ちなるは多く自身にてすら笑ふべきこと少なからねど、兎も角我は此時熱心なりしとは非常にして後日此熱心が萬般の障を排して事を成就せしめたるを悟り且熱心てふもの丶如何に勢力あるかを確知したりき、此事は後の經驗の部のうちにて更に詳しく語るべし。

此くてあること三年なりしが玆に一人の外邦の友人ありて我志を知り、大に助力せられたりしが故に、始めて相當なる敎員を雇ふことを得て、校務を整頓し、事業を擴張し且少しく閑暇を得ることゝなりしにより、外に交際を求めて志を廣く發表することを得たり、此時に聘せし敎員のうちに女子師範學校を卒業せし蘆野はる子及目下大坂梅花女學校舍監なる淺井夫人もありたり、殊に女子師範學校の卒業生を私立女學校に雇ふことを得しは、我學校が始めなりしにより、我心大に樂しかりき、

少しく閑暇を得るの身となりしかば、島田三郎君、河津祐之君、沼間守一君等知名の諸士の賛助を得て已婚の婦人に智識を與へ、兼ねて交際の道になれしめんとての目的を以て、我校内に講談會を設け、女子に必用なる演說などを催ふせしが、每會諸名士の盡力によりて有益なる集會なるも如何せん、未だ交際の道に慣れざる我國婦人の常とて演說終るや直ちに散會して歸宅の道に就くといふ有樣にて當初の目的を十分達することを能はざるにより、これでは不可なりと思ひ、種々相談して婦人のみ相會し、會食でもなさば好結果を見んかとて、之を試みしも相會して言すくなに、たゞ／＼食するのみなるにより是又同樣にて望みの點に達せざりしかば、これでも不可なりと思ひ、次の度にはいろ／＼と考案をめぐらして料理人を雇ひ、西洋料理の法を學び、會員各自が手づから料理して會食することゝなせしに其結果稍よろしく漸次入會者も增加し來ることゝなり、終に當初の目的を達することを得ることとなりたり、

又同じ頃に米國人マクニール孃とゝもに校內に一の日曜學校を設置し女子師範學校の生徒をキリストに導かんことを希圖したりしが、同校生徒にして今は天に行かれたる安岡いく子は篤信忠實なるキリストの信徒にして、每安息日に十八內外の生徒を導き來り、大に力を此日曜學校のために盡くされたり、いく子に就ひては何れの日か其小傳をつゞりて紹介することあるべし、而して此日曜學校はいく子の函館行及マクニル孃の歸國に際會して殘念にも十分なる好結果を見ずして止みしも、結果を見るべきものなきにあらず、

此校に任にあること尙三年校運次第に盛大に赴きしが、此時に當り我　良人官を辭し北海道に傳道せんとす、此に於て

我も之を助けんため、且は一の目的を達せんため、名殘をしくも校を擧げて之れを米國傳道會社の手に委ね愛惜の涙にくれつゝ良人とゝもに明治十四年八月北海道に赴くことゝなりたりき、我初め微力を以て此校を起し爾來之れと運命を共にすること六年、而して尙此後も此校と共に死せんことを願ひ良人が北海道に傳道するの決心をなすまでは此校を別るゝの期あることを思はざりしなり、それとも今や天意我をして北海道に行かしむ、我は之れに服從して行くべきのみ、さりながら我が產みの苦を盡したるものに離れんとする豈涙なきを得べけんや。

文學

甌北が李太白を評するの一節

無名氏譯

李青蓮は自らこれ仙靈の降りて人と生れたるなるべし。司馬子微かれを見て「このひと仙風道骨あり、ともに八極のおもてに神遊すべし」といへり。賀知章もまた彼を見てたゞちに「謫仙人」とはなしけむ。青蓮のち放たれてなにがしの山に還りしに、陳留の採訪使李彥允といふもの北海の高天師に請ひて、彼に道籙を授けたりといふ。蓋しこの神采よのつねの人に異なりしところありたればならむ。

青蓮の詩の及びがたきところはいづれぞ。神識いたく世の上にたちすぐれ、飄然として來るかと見れば忽然として去る。かの章を雕り句を琢くは彼の屑しとするところにあらず。心を鏤め骨を刻むは亦彼の勞するところにもあらず。これ天馬そゞろに空を行き、かなたこなたに奔逸して羈しがたき勢あるなり。もし沈刻なるをいはゞかれ少陵に及ばじ。雄鷙なるをいはゞ昌黎に及ばじ。されど杜韓にくらべ見るにかなたは力を用ゐて痕迹をまぬがれがたし、こなたは力を用ずして手の觸るところ春をなす。これ仙と人とのけぢめなりかし。嗚呼青蓮が一生の本領はかの五十九首にあらずや。古風の第一首にて口を開けば、便ち大雅の作らざるを說く。騷人の起りて詞に哀怨の多かりしはこれすでに正聲にはあらずといひ揚馬の流宕なるはいざ建安のこのかた風雅綺麗となりて法とするに足らじといひ。唐の世となり文運はじめて興りけるにおのれあだかも其時にあたりて、力を刪述の筆に籠め、獲麟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の後を繼がむとはいひけむ。その眼光のそゝぐところを見るに、すでに前に古人なく後に來るべきものなしとしつ、千載の後にて上風雅を接がむとするに似たり。これ蓋しみづから才分の高く趨向の正しくして、八代のおとろへたるを起すに足ることを信じ、身を以てこれに任じたるによるなるべし。彼あに徒に大言をはきて、人を欺くものならむや。

小説

黒頭巾

第五回　　十八公子譯

かくばかり使命を辱かしめたる使者はまたとあるべくもあらず。牧師は懇懃に彼等を迎へしかど、互の坐さだまりて後はたゞすら默然として、彼等が持ち來りし重要なる職務を語り出ださん重任をば少しも輕うせんとはせざりき。

其問題は明らかに牧師にも知られたるに。

それのみかは、フーパー氏が額のあたりに纒はれたる黒覆巾は、彼等が眼にも物うげに微笑せし痕跡をかすかに認め得べかりし、温平たる口元より上の方を打かへしたりしかば、たゞこれ一片の縐紗も、彼等が想像には、牧師が中心をまたくたれこめて、兩者が間のいとも恐ろしき秘密の記標とも思はれしならむ。もし今にして覆巾だにとり去られたらんには彼等も思ふまゝにはいひ出で得たりしならむ。

されど取りさらるゝそれまでは如何にしても。

かくて、彼等はたゞ默然として一言をも交さず、心の中はもだえにもだえて、目に見えぬ一種の視力は彼等をば睨めつくるばかり思はるゝフーパー氏が目許をば、心やすからず打ちながめては、縮みあがらんばかりにおそれつゝ、空しく時を過せしが、終には、この事を仕了せんとなか〳〵にたやすからず、とてもかくても牧師會議を起しがたくば、委員會にしても附すこそよからめ。さらでは其功あるまじとて、たゞいたづらに使命を辱かしめて立ち歸りぬ。

されどこの里にたゞ一人、他の人々は恐れに恐れたりける黒覆巾をば、些も恐れざりし婦人ありき。かの委員の人々が何の功もなくてかへりしのみか、一言だにうち問ふ事もなさゞりしよしをもれきゝて、かの温然たる中に剛毅を含む例の氣質勃然として抑へがたく、一時毎に黯淡となりまさりて、フ

ーパー氏が周圍を掩ひかくすかのあやしき妖雲をば排らひ退けんと心をさだめぬ。

げに牧師とてもにくからず思ふ中なりしかば、かの黒覆巾が閉ぢこめたりし奇怪の事をさぐらんは、この人ならではなかりしなり。渠は牧師がもとをおとづるゝや、互に心を置かざらんためにとて短刀直入に彼の事をかたりいでぬ。渠は牧師が坐につくをまちて、眼も放たで覆巾を打ち守りしが、多くの人々が魂を寒らしめしかの黯淡たる、恐るべきものは絶えて得認めず。たゞ彼が額の下、口の上を掩ひたる二重の縐紗の呼吸の爲めにかすかに震ふが眼に入りしのみ。

渠は聲高にうち笑らひつゝいひぬ。「げに。わが打見る度ごとにうれしと思ふ君が顔のかくされたる外には、一片の縐紗の中に何の恐ろしきともあらず。いざ君よ。日光をしてその雲の蔭をも照さしめ玉へ。まづとにかくにその黒覆巾をとり去りて、さて其後にこそ、御身がそを被り玉ひしわけをばかたり玉へ。

フーパー氏が顔上、一點の微笑を印し來りぬ。

彼はまたいふ「われら人類みなひとしく。おのが覆巾をとり去らん時、かならずいたるべし。あしうはとり玉ふな。わが愛しき人。われ其時まで、この片帛をつけ居るとも。

このわかき婦人は推しかへしていふ「御身がのたまふとはあまりに不可思議にこそあれ。さらばせめては言語の上ばかりにても覆巾をとり去り玉へ。

牧師「エリサベスよ、さらばわがかつて誓ひてしこゝろの許さん限りを答ふべし。まづこの覆巾のたゞ一箇の外形いたづらなる記標に過ぎざることを知り玉へ。アヽわれは明るきあたりにも、くらき處にも、寂寞の境にても、公衆が見る前にても、はた親し友どちの間にも、たえて知らざりし人々の前にもみなひとしく、長しへにそをつけしめらるゝなり。如何なる人の眼か、この覆巾のとりさられたるを得見んや。この凄じき影はこの浮世よりわれをば遠ざくるなり。アヽイリザベス、御身とてもそがうしろに來らんと叶ふべからず」。

「如何なる悲哀、如何なる苦悶ぞ、御身が眼の長しへに、かく暗まされんばかり、御身を苦しむるに至りしぞ」。と渠ほ氣色ばみて問ひぬ。

「もしそが悲哀の表號ならんには、われも世の人々とひとし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

く黒覆巾にて代表らるべきほどの悲哀なきにしもあらず」。「されど、世の人々が、そをわけもなき悲哀の表號と見ざらんには、如何にすべき。」イリザベスはいひせまりぬ。「げに今こそ御身は人に愛せられ尊まれもせめ。されどもし御身こそ人知れぬ罪惡のくるしさにその顔面をかくせしなれなど、口善惡なくさゝやかるゝに至らんには如何ばかり口惜しきとなるぞや。御身が尊とき職務のためにその輕蔑をはらひ玉へ。」

隨感

一村雨

ひさで

近くて遠きは月夜の火事、これに反せるは男女の間ぞとよ頂禿し老女はいふめり、まことや若きほどは血氣さだまらず、男心を秋の空と譬ふれば女心を冬の雲とゆふぐれの其機手見てもの思ふ、やがて身にふりかゝる一村雨、過てぬるての紅葉、照ます眞心の鏡にみれば、霞も霧も消はつるぞ情のこりかたまりし蒸發氣のなせるわざなる、この雲行をうかゞひあはれ一村雨のはら〱と待わたる男なんありける、この男祖國の隆盛計らんと殊勝にも志ざして、何とやらいふ雜誌發発して我まづ編輯の任にあたりぬ、ちとの文才と耳學問にいつしか男女交際てふ事しおぼえて今日迄エンゲーヂリングとり替せしも五人計ありとか聞えし、心の中にはおもふやう、野の花の色美しと手にとれば又梢なるにめとゞめらる、げにや蓮花草チヨトつみて後は野におくが趣深しと。又それと心うつり摘まほしき花を見る時は此の方より水そゝぎ、けしきばみていふやう、われを人の心多きものなりといへるよしなれど、一生の苦樂をともにせんとするに、一朝の約にかゝはりて、身をおへるまでたのしびの方を葬りはてんもかなしく約をときしこと何かあらん、古歌にもいへる如く行く水に數かくよりもはかなきものはわれなりなどほのめかしぬ。某女學校の生徒年の頃ろ十八計りなるが、若き習ひのながめがちに過す折、ふとこの男にあひてより、人しれぬ思ひのそはりて、青空のどけき朝もあからひく夕も袖にかゝる一村雨、夜は枕もうく計り、夢にあひみては又おもひをそへぬ、一度あひしをゆかりとして、かの男、正宗よりするどき筆先きとぎすまし、生けみころしみ、文にくどきたつれば中々に一と度びはすまふ心も出で來つれ、つひにはたよ〱とまけて、人しれ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず理粧室にこもりて、紅筆にあかき心をみするやう成ぬ、人の情を弄ぶといふ事カード玉突などのおもしろみのおよぶべきにあらず、われもてあそばるゝやうになりてこそ弄ぶの本意なれとスコッチの洋服きたる紳士かたりき、この女生見ると見、聞と聞ものゝわが思ひをそゝのかすやうにおぼえ、肩負上げにもあまる文がらとり出て見ては一人うちゑみ、とはれぬ事を口ばしり教場にて教師に叱りこらされぬ、かの男音信ことに少しづゝ情の溶解物を入れて、かくいはゞかくいひこすらん、かくいひやりてかくいはせんとおもふがまゝに心を蕩かして又これも蓮花草ありとつぶやくやうに成ぬ、女生は卒業も近づきぬ、かねて聞し歐米の美風をまねびて自由結婚をと故鄕の父母のゆるしもうけで、かの男の許へこのおもむきいひやれば、しばしまちてよとの返事きたりぬ、飛立てよろこばんとたのめしにはたがへと深くも思ひたどらで、又文の交通前よりしげくありしに、此方よりやりし文の中の言葉、心にかなはぬよしにてかゝる浮薄なる人とは交際せんもおもしろからずとて包そへたる返事きたりぬ、包ときひらけばおくりし文一ツも殘らずこの中にあり、中には封だに解かぬもありぬ、この女生かの男にはじめてあひ見しはある音樂會なりし也、この時よりそのすがたおもかげに立て忘られず思ふうち、文きたりてうれしき交際を結ぶやうに成ぬ、其他あひみしも多くは言葉かはす折ならで愛敬こぼれん斗の顔見しのみにて、とげある舌にものいひかけられし事はすくなかりき、さるを、それに心まよひてかく氣もくるふ斗にありしはおろかありといへばおろかなめれども、世の有樣も未だしらで、學びの窻深くたれこめし少女のさゝやかなる胸の中かき亂だし、ともすればむら雲おそひ勝の心をもてあそびし人こそ、いとも〳〵罪ふかきわざなれ、よの若き人々此一村雨の露にぬれで、心をおちゐ、靜におもひ計りね、さらずはこの雨雲はいよ〳〵ひろごりてのどかなる日の光りと見んこと遂にかたかるべし。

山月子曰く、われ此文を讀みて、憮然として涙下る、嗚呼日本の女子、多くは弱く小さし、未だ眞正の偉人を觀るの眼識を有せず、而して日本の男子、多くは靈愛なく純潔なし、未だ赤心より淑女を重んずるの精神あらず、嗚呼之を奈何すべき、われは確信す、男女の愛をして基督の直接なる洗禮を受けしめずんば、決して此狀況を救ふこと能はずと、世に輕佻浮薄の男兒あり、而して義人之と同じく視られんとし、世に不義不節の女子あり、而して淑女之と均しく惡せられんとす、遺恨何ものか之に如かん、吾人は天を仰で基督の愛の泉が、日本社會を隅なく潤さんことを熱禱する者なり。

批評

油地獄を讀む（二）

透谷

われは非凡なる綠雨の筆勢を察して、彼が人類の心宮を觀ずるの法は先づ其魔毒よりするを認めたり。彼は人類を一種の軟骨動物と思做し、全く誠信なく、全く忠誠なく、心宮中に橫威を奮ふ一種の怪魔が自由に人類を支配しつゝありて、咄々奇怪至極の此社界かなと觀念し來りて、之を奸猾なる健介に寓し、之を窈窕たる美形美禰子に箝め、之を權勢者なる世々良伯に寄す。之を小歌に擬し下宿屋の女主に扮す。著者の眼中社界の腐濁を透視し、人類の運命が是等の魔毒に接觸する時に如何になる可きや迄甚深に透徹す。是點より觀察すれば著者は一個の諷刺家なり。然れども著者の諷刺は諷刺家としての諷刺なる事を記臆せざる可からず。自然詩人の諷刺は、諷刺するの止むを得ざるに至りて始めて諷刺す。始めより諷刺の念ありて諷刺するにあらざるなり。始めより諷刺せんとの念を以て諷刺する者は自ら卑野の形あり、宜なるかな諷刺大王（スウイフト）を除くの外に絶大の諷刺を出す者なきや。

スウイフトノ諷刺せし如く、スウイフトの嘲罵したる如くに沙翁も亦諷刺の舌を有し、嘲罵の喉を持しなり。然れども沙翁の諷刺嘲罵は平々坦々たる冷語の中に存し、スウイフトのは熾熱せる痛語の中にあり。ハムレットに吐露せし沙翁が滿腔の大嘲罵は自ら肅嚴犯す可からざる威容を備ふるを見れど、スウイフトの痛烈なる嘲罵は炎々たる火焰には似れど未だ陽日の赫燿たるには及ばず。

諷刺にも二種ありと見るは非か。一は假時的なり、他は永遠にして三世に亙るなり。假時的なる者は一時の現象を對手とし、永遠なる者は人世の秘奧を以て對手とす。政治を刺し社界を諷する者等は第一種にして、人生の不可避なる傷痍を痛刺して自らも淚底に倒れんとするが如き者は第二種なり。第一種は第二種よりも多く直接の視察より暴發し、第二種は第一種よりも多く哲學的觀察によりて湧生す。

第二種のものは戲曲其他の部門に隱て、第一種の者のみ諷刺の名を縱にする者の如し。一時の現象を罵り、政治若くは社界の汚濁を痛罵するを以て諷刺家の業は卒れる者と思は非にして、一時の現象を透觀するの眼光は、萬古の現象にも透觀

すべき筈なり。一現象は他の現象と脈絡相通ずるをも徹視すべき筈なり。故に諷刺家は假時的なりとして賤しむ可きにあらず、一現象の中に他の永遠の現象を映影せしむるを得べければなり。エゴイズムを外にし、狂熱を冷散するとも別に諷刺の元質世に充盈せりと見るは非か。

○新刊雜誌　山月子

●國語漢文講義錄（吉川半七發行）中等教育を目的として發行する者、講義明晰にして遺憾無し、且つ質疑應答、懸賞文などあるは、此誌の特色なるべし。

●城南評論　是れ文學の雜誌、屹然として一旗色を樹つ、載する所の文、面白きもの多し。

●後進　青年の手に由りて成る、活氣欝勃たり、吾人は後進が義俠の心を發揮すると共に、寛弘偉大の精神を修養せんことを望む者なり。

●東京評論　政界益々繁忙ならんとする際、東京評論は出でたり、國政經綸を以て任ずる者、吾人發刊の辭を讀みて、能く其實を盡さんことを祈る。

●おだやか　横濱より發行す、基督教青年の手に成る、自任の氣、紙上に躍々たり、前途有望の雜誌よ、自重なるべし、謙遜なるべし。

●呼聲　長崎より發行す、基督教の雜誌なり、希くは同地方の光たれ。

●ばらだいす　雲州松江より出づ、基督教主義の雜誌なり。

●朝鮮新報　朝鮮の事本邦人にして注意せざる者多し、吾人豈此新紙を紹介せざるを得んや。

新著の書籍、多く机上に在り、次號に於て批評すべし。

女報　可愛子編

●御救恤　四月五日、朝鮮近海に於て難破せし、日本郵船會社汽船出雲丸乘員五十餘名生死不明、又本月二日釧路港に於て難破せし、北海道函館渡邊熊四郎所有汽船雷電丸乘員四十餘名死去の趣、憫然に思召され、御救恤として、天皇、皇后兩陛下より、出雲丸遭難者遺族へ金三百圓、雷電丸遭難者遺族へ金二百圓を下賜ひたり。

●美人切りの鑑定　美人社會に一大恐慌を來したるは、近頃各所に於て夜中通行の婦人の面に傷を負せて逃げ去ることなり、巡査本部を始め各警察署共に嚴重に取調べ、中にて右は色情狂ならんとの說もあれど、其筋の取調によれば、是迄處々にて傷を受けし者等は、何れも其際狼狽して人相等を詳にせざるも、衣類は悉く異なりて、或は唐棧羽織を着し居り、又は職人躰或は書生風なるも、年齡は同樣の者なりといふ處より察すれば、彼れ何事か願望ありて美人何人の顏に傷を負はせば、何等かの願望成就するとかの迷ひより、斯る所業に及ぶならんかとの鑑定なりと、又携ふる器械は小刀にあらずして、指輪に双物が付き居るもの〻如く、是迄遭難せしものは何れも手の平にて面を撫でらる〻や、忽ち負傷したりと云ふ申立なりとぞ、捜索嚴密なれば近きに取押へらる〻ならん。（每日新聞）。

●彌久曠日　花風鬼未だ網せられず、堂々たる大都の中、往々にして白波の途に人を脅かすあり、圓帽角燈の人、恐らくは彌久曠日の誹を免れじ。（東京日々新聞）。

●速かに顏切を逮捕せよ　と題して、四月二十八日の都新聞は、社說に論ぜり。

●東京市中一種の恐懼　と題して、四月三十日の國民新聞は、同じく社說に於て女子の顏を切る兇漢に就きて、警察官の注意を促がしたり。

●衆心一致　して警官に望む所ろ切なり、警官たる者、益々探索を嚴にして、此兇漢を捕獲せざるべからず。

●醜業婦女　海外渡航本邦婦人の醜業に關しては、其筋に於ても專ら注意して婦人の海外旅行劵は容易に下附せざるやう、關西沿岸の各府縣へ訓令せられたるが爲め、醜業婦女海外密航は頓に其跡を絕ちし如き樣なりしが、此頃其筋に於て婦人の海外渡航に就き、從前の如く嚴重なる取締を加へず、公然醜業を名として渡航するもの〻外は容易に旅劵を下附せらる〻事になりし由の說あり、是れ海外移民獎勵の政策を當局大臣が執らる〻結果ならんと噂さす。（東京日々新聞）。

●娼妓出稼續々あり　越後中蒲原郡物產木綿縞織出元なる袋津村には、工女凡そ七百人以上も入り込居りしかど、近來の不景氣挽回の見込立ざるより、收支相償はず、巳むを得ず幾分の工女を解雇せしが、此等の婦女は家に歸るも無業の身なれば、父母の命に依り他國へ娼妓出稼を願出で、現に此程二十六七名の婦人は瀨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ノ上横濱等の抱主に連れられ出發せりと云ふ、アナうたてきしらせ。（東北日報）。

●鳥取縣尋常師範學校女教師の數　は三十人あり。

●愛媛縣尋常師範學校　にては女子の卒業生十二人を出したり。

●私立高尋女學校　愛媛縣下の同校は、設立以來日尙淺きも將來に有望ありと云。

●婦人祈禱會　仙臺四個の基督教會聯合婦人親睦會は、四月十六日開會せり、宮城女學校の幹事佐伯一陽氏は、同日來會の兄弟姉妹を饗應せられたりと。

●女子同窓會　仙臺市東二番町小學校女子同窓會春季總會は、四月十九日午后二時より同校内に於て開かれたり、來會者は會員及協賛員實業家等無慮百數十名。

●三重縣通信

◎三重幼稚園　三重幼稚園は三重女學校の構内にあり、その保姆は二人、幼兒男二十二人、女十三人なり、そもそも本園は明治二十一年の創設にかゝり、既に四年の星霜を經るも、いまだ以て盛大の狀を呈せざるは、蓋未だ父兄に於て本園の必要を感ぜざるによるなるべし。

◎女學校の景況　最近の調査によれば、本縣下にては普通女學校一校、産婆學校八校、同支校十二校、女禮式學校一校、裁縫學校一校なるよし、而して各種學校の女教師は、女十四人（男六十九）にして、前年より女は五人をまし、生徒は女二百二十四人（男千百九十七人）にして、前年よりは女は八十九人をまし、卒業生徒は女四十七人（男五百十三人）にして、前年より女は十三人はますと。

◎入學　各尋常小學校卒業女生にして、このたび養正高等小學校に入學せしものは五十三名なりき。

●滋賀縣通信

◎私立大津幼稚園　此度大津通俗教育會の設立に係る幼稚園は、大津町會の許可を得て、町有の舊幼稚園を借用し、諸規則を改正し目今園兒募集中にて、保育料は一ヶ月三十錢なりといふ。

◎婦人慈善會　に於ては四月十六日、大津別院に例會を開き、講師として赤松連城氏京都より來會せり、尙此際同會擴張の爲め大に會員を募集せんとて、臨時總會を開くといふ。

●京都通信

◎貧民學校詳報　京都なる貧民學校に付ては兼て一寸通信し置たることなるが、今尙其詳細なる事情を聞くに、同校は毎週二日新島未亡人、小崎夫人、湯淺夫人等に因て教授せらる、目下生徒の數二十五六名にして、六七人を除の外は悉く女子なりと云ふ、此外安息日學校もありて、矢張同夫人方に因て教授せらる、先日訪問せしに、新聞紙にて作りたる手習草紙など柱に懸けあるを見受たり。

◎孤兒館　日本人の流行に浮かるゝの甚き、寔に幾度か義人の腸を斷たゝしむ、今は孤兒教育流行の兆大に各地方に顯はるゝを見る、大坂にては佛徒等到處の戸口に孤兒救育贊成員てふ名刺を揭げ、京都にては越後獅子を舞はせながら、尙孤兒救育を以て自ら許す者あるを見るに至る、先日計らず道に此種の越後獅子に遇ひ其背部を見るに實に左の文字あり、

孤兒館、下京區木之元町五番戸福田組、輕業俳優兼家

と嗚呼余は此事の爲に、同志の友人と共に歎ぜり、石井君本郷君亦共に歎ぜり、天下の義人思ふに到處に悲み泣かん、余は猶時を得所謂孤兒館なるものを訪ふて詳細を我同志に報ぜんとす。

◎寄附金　曉星園主、本鄉定二郎君、紀州より一婦人の賣女とせられんとするものを救ふて到る、君去るの後有志爲に金を集めて八金を得たり。

◎マイヤ女史　右に付同志社女學校のマイヤ女史は、若し彼女にして救ふて同女學校の教育を受けしめ得るに於ては、斯かることの爲に用ゆべき金圓若干ある故好都合なる旨申されたれども、何分賣女とせられかゝりたる位の女故元來無教育にて到底俄かに左樣なる高等なる教育を受るに堪えざることを聞くに及んで、左らばとて自ら二圓の金を寄附せられたる由。

●高知縣通信

◎高知縣尋常師範學校助教諭兼保姆門奈くり女史は、今般同校女子部舍監兼務申付られたり、同校雇教員中島つれ女史は、同校訓導に任ぜられたり。

◎高知育兒會にて、去月中の入室妊婦は四名にして、外出妊婦は五名なりし、又た同會の産婆生徒は四十名なれども、目下自費生二十名、給費生一名なり、本年の入學試驗は來る六月上旬なりと云ふ。

◎高知英和女學校從來の建物は、舊士族屋敷に修繕を加へ、授業し來りしが、授業上頗る不便を感じ、今般二反餘りの地面を買ひ入れ、既に新校舍の建築に着手せり、又た學科にも大に改良を加へらるゝ趣なり。

●埃及の婦人　は其夫の外、他の男子と交際せざるの習なり。

●女子の高等教育　米國コロンビヤ大學にては、既に女子の入學も許したるが、近頃セント、アンドリユウス大學の社員は、神學、美術、科學の三科に、女子の入學を許さんと決したる由、又米國エール大學にては、來學年より男女の差別無く、哲學博士の學位を得せしむる爲、高等科を設くる由、エール大學は、新たなる教育の方法を採用するに、保守主義を取るやうに思はれたりしが、同校社員此處の决議は、以て斯の如き考へを辨明するを得可く、米國中最良の學校にて、英國のチクスフヲルド、ケンブリッヂ大學の如く婦人をして最高等の教育を得せしめ、女子教育の史上、一新時期を開くに到るや必せり。

正誤

●前號の隨感、十三行目「吾人豈化せられざるの理ならんや」は、吾人豈化せられざるの理あらんや」の誤。

●前號の一〇一一頁孤兒の友欄内北海孤兒院支出金内譯の内、金五拾一圓二厘とあるは、金五十一錢二厘に付爰に正す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	五月五日
白米（一円ニ付）	
一等米	九升七合
二等米	九九
三等米	一〇〇
四等米	一〇四
五等米	一〇八
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗三升六合
尾張米	一三一
美濃米	一三五
忍領米	一二七
行方米	一三八
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一八〇
竹林麥	一八五
梅澤大豆	一九五
青柳大豆	一九五
吟小豆	一六七
白胡麻	一一八
黒胡麻	一四〇
鹽（一叺ニ付円）	
赤穗	三、三五
大齋	三、四五
本齋	五、六五
新齋	六、二五
醬油（一樽ニ付円）	
最上	[illegible]
極上	[illegible]
上物	[illegible]
中物	[illegible]
並物	[illegible]
[illegible]（一樽ニ付円）	
地酒上白	六、八〇〇
同上赤	六、五〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	五月五日
夜具（一枚ニ付）	
三州木綿六縞	二円、四五
同二〆目入	二、八四
唐草木綿	一、八二
同一〆八百目入	二、一〇
佐織縞中綿	一、八五
同二〆目入	二、四八
蒲團（一枚ニ付）	
三巾唐棧	七九
同大和縞	五九
同佐織縞	七九
四巾唐草	九三
同佐織縞	九五
八王子織物（一反ニ付）	
本糸織鼠物	四円、二五
同替立	五、五〇
同珍柄	七、〇〇
節糸織	三、二五
一樂織	七、五〇
同珍柄	八、〇〇
無地黄八丈	四、〇〇
同大柄	五、五〇
甲斐絹	三、〇〇
同本場	四、五〇
黒八丈	八、〇〇
黒七々子	五、五〇
白斜子	六、〇〇
嘉平治平	五、〇〇
節臺平	七、〇〇
仙臺平	一、五〇
絹糸（一斤ニ付）	
本練花色	二、七〇
同色物	二、三〇
羽二重糸	二、四〇
芥子糸	二、九五
極天色物	二、三五

品名	五月五日
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二円、五五
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七七
同中頭	一、五五
同中茶	一、二〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七五
同大頭	一、五〇
同中頭	一、四〇
同中茶	一、一〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎	七錢五
大森	七五
深川砂村	七五
大師河原	六〇
潮田	五〇
上總	五五
鰹節（十本ニ付円）	
土佐夏小	二八円、五〇
薩摩夏小	一八、五〇
伊豆夏小	二九、〇〇
駿遠夏小	二六、〇〇
房總夏小	二三、〇〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六円、五〇
胡麻	一〇、三〇
荏油	一〇、二〇
桐油	五、八五
冬	七、四三
坂水	七、四五
石油（一箱ニ付）	
[illegible]	円 ……
[illegible]	……
[illegible]	一、六四
[illegible]	一、六〇

第廿三號目錄

女學生當號より大改良

細川夫人の人物……星野 愼
春雨……秋野 すゝき

漫筆
兼好法師……向陵子
清女簾をかゝぐる圖に題す……伊藤 艮子
葉子の妙所……すゞ子
春のはじめ人の許に遣しける……土木 政子

詩歌の卷……
博物の園……某學生
わが園……
南洋の島影(其二)……香籾生

文欄
常盤雪行の圖を見て感あり……筒井くに子
待花……中泉 澄子
山水の圖に題す……見田 功
春の筆……福原 登利子
花信を聞く……大森 みき子
婚姻式……半仙女史

栞
唐詩選講義……
秘藏錦……
雅樂多袋……
古文庫……
須磨の秋(源氏)……
東山の春(謠曲)……

右は去る廿一日發兌せり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

吾黨之女子教育

巖本善治編

小形二百十七ページ　定價郵便共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すととす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
辨舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發兌元　明治女學校

發賣元　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版　百人一首講義

正價金廿八錢　郵税四錢

御高評を得たる百人一首新年に至り注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば玆に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶の案内書なり。

發兌元　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

大取次　神田淡路町一丁目　敬文堂

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生著

皇后宮御覽

增補訂正第二版

はゝのつとめ

親の卷　妊婦産婦の心得　定價金三十錢（郵税二錢）
子の卷　日本育兒法　定價金四十五錢（郵税四錢）

右は我國無双との好評を博したる日本母子衛生書なり先般增補訂正の上再版したり醫科大學産科婦人科小兒科病室幷に群馬縣高等小學其他諸女學校に於て參考書又は用書として使用するところ少からず。

書肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。本町島利支店。通鹽町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述　つれ〴〵草講義	郵税二錢	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述　文法口授	同　同	一冊	同十二錢
船越鼎太郎君著　產婦小兒攝生法	同二錢	一冊	金十錢
中島俊子君著　善惡之岐	同四錢	一冊	同卅五錢
橫山雅男君著　婚姻論	同四錢	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說　廢娼演說	同二錢	一冊	同五錢
巖本善治君述　妓樓全廢	同二錢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治兩君著　公娼可滅	同二錢	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著　植物學	同二錢	一冊	同十三錢
林學士星野愼之介君著　昆虫植物金石採集法	同二錢	一冊	同八錢
女學雜誌社編輯　演說著作材料	同四錢	八冊	同四十錢
巖本善治君著　本村鐙子少傳	同二錢	一冊	同八錢
訓蒙繪雙紙　猫と鼠	同二錢	一冊	同五錢

下六番町六番地
女學雜誌社

毎月二回　黨報　定期刊行

第拾壹號（四月廿八日發行）

○黨論
◉殖氏論……板垣退助

○黨報
◉自由黨臨時大會◉協議會◉代議士總會◉代議士部屬◉山梨縣自由黨員總會◉平民俱樂部◉加盟及脫黨

○論說
◉新議會の性質に就て……山田東次
◉實業論……杉村寛正
◉宜しく實際の政治に着目す可し　三崎龜之助
◉櫻花の態に習ふ勿れ……杉田定一

○時事
◉條約改正案調査委員◉大使派遣◉答辯の材料◉對等條約◉政治上の德義◉政府と議會◉對凾◉調和◉松方伯◉品川子◉黑田伯◉青李◉上奏◉警告◉貴族院の傾向◉民黨の前代議士◉立憲中正黨◉條約改正研究會◉關西會◉關東會◉關東會規則及關西會規約◉伊太利國内閣の辭職◉朝鮮◉朝鮮公使◉償金返還◉御用記者◉官吏侮辱◉改革の時代◉政略◉使ふ可からす◉慰勞◉非干涉郡吏の非免◉賞罰◉總て金◉放火と警察◉内丁氏◉慈善◉群馬縣會中止◉縣會の賄賂沙汰◉植民地に適す◉吏黨の元帥◉斷平◉地方官◉投票の紛失◉時事日記

定價　一部前金六錢　十二部同六十六錢　廿四部同一圓廿錢　全國無郵稅
廣告料　行數回數ヲ問ハス一行金十錢ノ事

東京市芝公園　自由黨黨報局

米國神學博士ニユーマン、スマイス氏原著
マスター、オブ、アーツ小谷野敬三君 村木經策君 合譯

耶蘇の非凡
定價十二錢

基督の自然
定價十五錢

今や基督敎界中一方は古風に過ぎ一方は自由に流るゝの間に立ち毅然として中正の方針を執り哲學理學の關係を論究して基督の神性を明示し眞實忠正の信仰を養はしめんとするは本書の特色なり蓋し該書は改進的宗敎家中屈指の秀才なる米國神學士ニユーマン、スマイス氏の著にして論程の該博斬新なる復近來稀有の良書たり是修德正行の伴侶たり人生行路の指南車たるを得べきは敢て弊店の保證する所なり四方の諸兄姉希くは一讀し賜はんことを

奥野昌綱翁序 戸川殘花著

●讚美歌てびき
定價八錢 百三十二頁

吾人基督信徒に取つて讚美歌の必要有益なるは今日豈事新らしげに喋々を要せんや然れども吾人讚美歌を誦するに於て其口調の古韵を踐むと又た叙事の異國に屬するとを以て往々其意味を解するに苦しむとあり夫のみならず此歌は如何なる場合に如何なる人が作られたるかを知らざるが爲め幾千金の玉も其由來を聞かざるに於ては唯通常の瓦石に少し光輝ある位の感じに止まらん嗚呼吾等朝に夕に神に交り信仰を燃し喜ぶ時に悲しむ時に唯一の好伴侶たる讚美歌其者にて一層其由來を知り一言一句も決して苟且ならざるを解するに於ては夫に依つて得る處の感動利益夫幾多ぞや是本書の出づる所以にして又本書の目的あり然して每章作者の傳記を附せられたる之を讀みて之を味ふて當時の情況を回想し神の榮光の妙へなるを感じて湮然淚に噎ぶの時あらん嗚呼熱信ある詩人にして初めて熱信なる詩人の情況を寫す事を得冀くは大方の諸彥一購以て活ける滑泉を汲めよ

發賣所
東京新橋出雲町一番地 警醒社書店
大坂土佐堀 福音社

自今 浪華女學校 ト改稱ス
舊一致女學校事
大阪府東成郡清堀村番外十四番
私立浪華女學校

●●幼年科生徒募集廣告●●

本校從來本科の下に豫科を置き高等小學相當の授業致來りしが今の小學教授上德育に慨する所あり又本校主旨とする所の敎育を施さんには之を更に幼少なる年代より初めざる可らずと信じ此度豫科の下に更に幼年科を新設し專ら尋常小學相當の授業を爲さまく欲す、而して此小學科の科程は無論文部省指定の規則に隨ふ、其精神上の修養法に至りては自から世間一般の小學校ある趣を異にする者あらん吾輩の精神希望に贊助せらるゝ諸君は請ふ其幼けなき愛孃を來學せしめよ。

月謝三十錢、束脩金なし、

遠路通學しがたき人は本塾に寄宿せしめ年長生徒一名を其保護者となし一切監督す。

右寄宿塾費一ヶ月二圓五十錢、塾費八十錢。

東京下六番町六番地
明治女學校

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

[illegible]原著

マスター、オブ、アーツ
小谷野敬三君
村木經策君 合譯

耶蘇の非凡
基督の自然

定價十二錢

定價十五錢

今や基督敎界中一方は古風に過ぎ一方は自由に流るゝの間に立ち毅然として中正の方針を執り哲學理學の關係を論究して基督の神性を明示し眞實忠正の信仰を養はしめんとするは本書の特色なり蓋し該書は改進的宗敎家中屈指の秀才なる米國神學士ニユーマン、スマイス氏の著にして論程の該博斬新なる復近來稀有の良書たり是修德正行の伴侶たり人生行路の指南車たるを得べきは敢て弊店の保證する所なり四方の諸兄姉希くは一讀し賜はんことを

奥野昌綱翁序
戸川殘花著

●讃美歌てびき

定價八錢
百三十二頁

吾人基督信徒に取つて讃美歌の必要有益なるは今日豈事新らしげに喋々を要せん然れども吾人讃美歌を誦するに於て其口調の古韵を踐むと又た叙事の異國に屬するとを以て往々其意味を解するに苦しむとあり夫のみならず此歌は如何なる場合に如何なる人が作られたるかを知らざるが爲め幾千金の玉も其由來を聞かざるに於ては唯通常の瓦石に少し光輝ある位の感じに止まらん嗚呼吾等朝に夕に神に交り信仰を燃し喜ぶ時に悲しむ時に唯一の好伴侶たる讃美歌其者にて一層其由來を知り一言一句も決して苟且ならざるを解するに於ては夫に依つて得る處の感動利益夫幾多ぞや是本書の出づる所以にして又本書の目的あり然して毎章作者の傳記を附せられたる之を讀みて之を味ふて當時の情況を回想し神の榮光の妙へなるを感じて潛然涙に噎ぶの時あらん嗚呼熱信ある詩人にして初めて熱信なる詩人の情況を寫す事を得冀くは大方の諸彦一購以て活ける滑泉を汲めよ

發賣所

東京新橋出雲町一番地 警醒社書店

大坂土佐堀 福音社

自今 **浪華女學校**ト改稱ス

大阪府東成郡清堀村番外十四番

舊一致女學校事

私立 **浪華女學校**

●●幼年科生徒募集廣告●●

本校從來本科の下に豫科を置き高等小學相當の授業致來りしが今の小學敎授上德育に慨する所あり又本校主旨とする所の敎育を施さんには之を更に幼少なる年代より初めざる可らずと信じ此度豫科の下に更に幼年科を新設し專ら尋常小學相當の授業を爲さまく欲す、而して此小學科の科程は無論文部省指定の規則に隨ふ、其精神上の修養法に至りては自から世間一般の小學校も趣を異にする者あらん吾輩の精神希望に贊助せらるゝ諸君は請ふ其幼けなき愛孃を來學せしめよ。

月謝三十錢、東脩金なし、

遠路通學しがたき人は本塾に寄宿せしめ年長生徒一名を其保護者となし一切監督す。

右寄宿塾費一ヶ月二圓五十錢、塾費八十錢。

東京下六番町六番地

明治女學校

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY